宝の山で、国民は幸せになったの？

平成３０年１２月２日（日曜日）月次祭　　こうとくにんげん塾 #224

もともとナウル共和国では、農業や漁業で自給自足の生活をしていましたが、宝物の発見により豊かになりました。ところが、その繁栄は長続きせず、逆にたくさんのものを失ってしまったのです。

南太平洋に浮かぶサンゴ礁の島、ナウルは世界で三番目に狭い国です。いろいろな国に支配されていた歴史を持つこの国が独立したのは 1968 年。この国は大きな宝物を持っていました。その宝物とは、鳥のふんです。サンゴ礁の上にアホウドリが落としていった大量のふんが、サンゴの成分によって長い年月の間に化学変化を起こし、リン鉱石という化学肥料の原料を作っていたのです。

独立後、リン鉱石の販売権を手に入れたナウル国民は、その利益を誰かが独占するのではなく、みんなでほぼ平等に分け合うことにしました。国民は税金を払う必要がないどころか、生活費が全員に支給されるのです。病院と学校の費用は無料です。リン鉱石を掘る仕事は出稼ぎの外国人に任せ、国民は外国人が経営するレストランで食事をします。ほとんどの人は働きません。働く必要がないからです。

しかし、そんな日々は長続きしませんでした。
リン鉱石は限りある資源だったのです。リン鉱石がほぼ尽きたとき、ナウルの人々の多くは働くことをすっかり忘れてしまっていました。目の前に青い海があり、船でこぎ出していけば、先祖がしたように魚をとって生活することができるのですが、そうする人はほとんどいません。ナウルは国際会議で支援の手を差し伸べてくれる国の意見に賛成をしたり、難民を受け入れることで補助金を手に入れたりといった方法で生き延びています。ナウルのとった方法は、これでよかったのでしょうか。

最近ナウルでは、深いところに埋まっているリン鉱石の二次採掘をし、その利益により国家再建をはかろうとする動きもあります。また、国民に畑を耕すことや、魚をとりに行くことを勧めるなど、生きるための新しい道を探し始めています。

出典「読解はかせ～社会編」（都麦出版）

今後の予定
１２月１６日（日曜日）１１時　月　次　祭
３０日（日曜日）１１時　師走の大祓

※ナウル共和国について（wikipedia）

【歴史】

1798 年　イギリスの捕鯨船の船長がナウル島を発見。
1906 年　リン鉱石の採掘が始まる。
1968 年　イギリス連邦内の共和国として独立
1989 年　初めてリン鉱石の産出量が減少する。
1999 年　唯一の収入源ともいえるリン鉱石がほぼ枯渇。
　　諸外国からの援助取り付けのための外交活動を活発化させる。
2001 年　アフガニスタン難民を受け入れ、見返りとしてオーストラリアから援助を引き出す。
2002 年　中華民国との国交を断絶し、中華人民共和国と国交樹立。中華人民共和国から 1 億 3000 万ドルの援助を引き出す。
2004 年　オーストラリアから 1,700 万ドルの無償資金供与を受ける。
2005 年　中華民国と復交。同時に中華人民共和国と再び国交断絶。
2006 年　中華民国の援助でボーイング 737 旅客機を購入。以前所有していた旅客機は財政危機によりオーストラリアで差し押さえられていた。

【概要】

アホウドリを始めとする、海鳥の糞の堆積によってできたリン鉱石の採掘によって栄えた。世界で最も高い生活水準を享受し、税金を徴収されずに医療や教育は無料、年金制度（老齢年金ではなくベーシックインカムとして全年齢層に対する給与）を始めとした手厚い社会福祉を提供していたが、20 世紀末に鉱石が枯渇してインフラを維持するのでさえ困難な深刻な経済崩壊が発生しており、オーストラリアやニュージーランドなどの近隣先進国や日本からの援助に依存している。

【経済】

主な産業は鉱業。他の産業分野に特筆すべきものはなく、農業はココナッツ栽培と養豚がわずかに見られる程度である。周辺を海に囲まれているにもかかわらず漁業はほとんど行われていない。

【繁栄】

かつては漁業と農業で生計を立てるミクロネシアの伝統的な生活スタイルであり、貧富の差もなく平穏な生活を送っていたが、20 世紀初頭から開始した鉱石の輸出によって経済繁栄し、特に 1960 年代後半から本格的なリン鉱石の輸出によってもたらされた莫大な収入で国民の生活や文化を大きく変化させた。

最盛期の 1980 年代には世界で最も高い国民所得を誇っており、国民は完全な無税、医療や教育も無料である他、莫大な収入を財源に全年齢層に年金が支給されていた。

当時はほぼすべての食料品と工業製品の調達はもちろん、政府職員を除くほぼ全ての労働者も中国や近隣のミクロネシア諸国から来た出稼ぎ外国人に依存しており、貿易依存度は輸出、輸入とも 110%という値だった。また一本しかない島の道路には採掘権で富を得た者が持ち込んだフェラーリやベンツなどの高級車が走り、食事も労働者相手に店を出した中国人のレストランで三食済ますといった生活だった。

このような単一の資源産業に依存し、大半の国民は働く必要がない状態が長期間続いたことは、後に問題を深刻化させることになった。

【高い失業率】
1990 年代後半からリン鉱石採掘の衰退による経済崩壊と財政破綻により、電力不足や燃料不足、飲料水不足が深刻化し、以降は諸外国からの援助が主要な外貨獲得源となっている。

2007 年に日本テレビの取材班が訪れた際には、日中の街中をうろつき回る多数の島民の姿が映し出されていた。これは 1 世紀近くにわたり、働かずに収入を得ていたため、ほとんどの国民が勤労意欲以前に労働そのものを知らないためである。

取材班が訪れた当時は、政府が小学校で働き方を教える授業を行い、将来の国を担う子供たちの労働意欲を与えようという対策がなされていた。しかし、鉱業だけに頼る産業構造だったため一定規模の民間企業が存在しないこと、インフラ整備が後回しにされていることなど悪条件が重なっているため、現地での起業も外国企業の誘致も進んでいない。2011 年の統計によると、島内の失業率は 90%に達している。

裕福だった時代から、グアムやサイパン、ハワイやオーストラリアなど国外のリゾート地に、土地やホテル、マンションを所有している。平時には現地の企業などに貸しているが、これらの物件を所有する第一の目的は、非常時にナウル国民を避難させるためであった。しかし経済の行き詰まりから資産の整理売却が進んでいる。

【健康】
国民の 30%以上が糖尿病を患っており、人口比の罹患率は世界一である。南太平洋の諸国全般と同様、太った人（特に女性）が魅力的とみなされる国民性があるが、経済的に豊かだった頃に食の欧米化が進んだことも原因の一つとされる。